

正しい決断をするための エビデンス・ベスト・インプラントロジー

日時：令和4年11月27日(土)
場所：梅田センタービル16階、Web
講師：小田 師巳先生



矢田 孔太郎(滋賀県)



令和4年11月27日(日)梅田センタービル16階にて第2回関西支部研修会が行われました。落ち着いてきたといってもまだまだコロナ終息の見えない状況を鑑みて、今回もハイブリッドでの開催となりました。

現地での参集16名 オンラインで30名以上の先生方にもご聴講いただき、その中には関西以外の先生方にも数多く多数聴講されました。

今回は、大阪府堺開業の小田 師巳先生をお招きして『正しい決断をするためのエビデンス・ベスト・インプラントロジー』というテーマでご講演いただきました。数多くの論文を根拠に、まさに日々の臨床診断のエビデンスとなるものを最新の臨床報告にもとづき、そしてご自身の経験を交えてわかりやすく講演いただきました。

午前の講義は、欠損補綴の治療オプションとしてのインプラントとBrの予後に関する比較で、一歯欠損Brの支台歯が両方生活歯であれば10年の予後にそこまで変わりはないが、失活歯であると5年後以降から大きく予後に差が出てくる。また、インプラント長径においては8mmと10mmにおいては有意差がなく、先生ご自身は長径8mmを基本に埋入しているということでした。また、インプラント周囲の角化歯肉に関しても、いろいろな意見がある中で最近ではやはり2mmの角化歯肉があったほうが予後が良いとの報告があるとのことであった。そして、私自身、印象的にのこっていることは、第一選択ではないが、カンチレバーに関して、歯冠幅径が8mm以内であれば、近遠心どちらであっても単独ケースと比べて有意差がないということであった。

午後は審美に関する話とソーセージテクニックに関してであった。前歯部のインプラントに関して、特に複数本のケースにおいては歯間乳頭を完全に埋めることはやはり難易度が高いのであらかじめ術前の同意が必須であること。

前歯部においては、二次オペは4か月後にロール法でCTGと同時に行うということであった。

ソーセージテクニックに関しては、動画を用いて大変わかりやすい講義であった。ソーセージテクニックにのまどめは以下のようであった。

- ・ 粉碎骨とBio-ossの混合移植材は顆粒状のためブロック骨と比べ母床骨への適合が容易
- ・ 創の裂開率が低い吸収性メンブレンを用いるソーセージテクニックは比較的安全な水平的造成術であると考えられる(GBRではじめに習得したい術式)
- ・ しかし、水平的に約40%吸収するために、オーバーオグメンテーションが必要 それでもインプラント埋入時に追加のマイナーGBRが必要な場合が多い
- ・ 創を裂開させないフラップの減張と縫合技術に習熟してきたら、非吸収性メンブレンを用いたGBRのステージへ!!

本日の講演は普段の臨床において疑問や悩みを解決する一つのヒントとなるようなとても有意義は研修会でした。本日の学びを日々の診療に生かしていければと思います。このような大変貴重な機会を与您えいただきありがとうございました。

